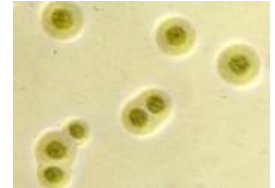


マイコプラズマ感染症の分子疫学： 新型コロナパンデミックの前後と今後の流行に備えて

Mycoplasma pneumoniae によるマイコプラズマ肺炎は若年齢層に多く、市中肺炎の中でも大きな割合を占める。数年ごとに大きな流行が起こることがあり、近年は2011年、2012年、2016年に患者数の増加が見られた。2020年も流行の兆しがあったが、新型コロナウイルスによるパンデミックが発生し、マイコプラズマ肺炎の発生は激減した。新型コロナパンデミックの間中は社会全体で感染防止策がとられ、人の動きも制限されたため、マイコプラズマ肺炎の発生数は非常に少なかったが、2023年の秋頃から少しずつ発生が見られるようになってきた。今後、再び大きな流行が起こる可能性は十分考えられる。



Mycoplasma pneumoniae のコロニー
(神奈川県衛生研究所)

マイコプラズマ肺炎の分子疫学研究は、流行している菌株の型分析や薬剤耐性遺伝子の調査などがある。*M. pneumoniae* の菌型には2つの系統があり、これらが検出される割合は年度ごとに異なっている。また、感染性に必要な細胞接着タンパク質にも少しずつ変化が起きている。薬剤耐性率も国や地域によって差が見られる。これらを詳しく見ていく上で *M. pneumoniae* のゲノム解析は有用である。分離株の関係や地域間での菌株の移動がよく見えてくる。新型コロナパンデミックの前後では、国内の流行株の菌型や薬剤耐性の状況が大きく変化してくる可能性も考えられる。マイコプラズマ感染症をより詳しく理解するために、次の流行に備えてどのようなことをすればよいか考えてみたい。

【講師】 国立感染症研究所 細菌第二部部長 見理 剛先生

【日時】 令和6年12月13日(金) 15:30~17:00

【会場】 神奈川県衛生研究所 6階 大会議室
(神奈川県茅ヶ崎市下町屋1-3-1)



*** 申込不要・参加自由です ***

【アクセス】

JR茅ヶ崎駅北口下車 神奈川中央交通バス
(浜見平団地行：町屋下車8分)
(平塚駅北口行：今宿下車5分)



問合せ：神奈川県衛生研究所 企画情報部 衛生情報課 TEL 0467-83-4400